

とうみみやた

富山市任海宮田遺跡

発掘調査報告書

—主要地方道富山外郭環状線歩道新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2000

富山市教育委員会

とうみみやた

富山市任海宮田遺跡

発掘調査報告書

—主要地方道富山外郭環状線歩道新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2000

富山市教育委員会

例　　言

1. 本書は主要地方道富山外郭環状線歩道新設に先立つ任海宮田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、富山県富山土木事務所の依頼に基づき、富山市教育委員会が主体となって実施した。
調査にあたっては現地発掘調査を株式会社マエダが、出土品整理調査を株式会社人間文化都市研究所が富山市教育委員会の監理・指導のもとに実施した。
3. 現地発掘調査期間・調査面積は以下のとおりである。
平成10年12月15日～平成11年2月15日 592m²
4. 調査担当は以下のとおりである。

団長	山本哲也
調査員	栗田一一生千葉博俊
調査員補助	大橋生飯野正子
5. 出土品整理調査期間は以下のとおりである。
平成12年2月3日～平成12年3月31日
6. 出土品整理調査は山本哲也が担当した。
7. 調査参加者は以下のとおりである。

現地発掘調査	安田清己・大塚笑子・大塚みち子・中井栄子・高倉ユリ子・福田恵子
出土品整理調査	金成南海子・荒井裕介・磯矢治彦・敷島志帆・中野知幸・仁科和弥・ 村松洋介・須藤友章・伴場聰・中村由布子
8. 本書の執筆は山本哲也が行った。ただし、「第2章 調査の経緯」「第6章 まとめ・「武」墨書き器について」は富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員・堀沢祐一が行った。
9. 出土品及び原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
10. 調査にあたっては、以下の諸氏より御指導・御協力を賜った。(敬称略)
新井重行・青木豊・内川隆志・小西雅徳・平川南・宮田進一

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯	2
第3章 調査方法と経過	5
第4章 基本層序	5
第5章 調査成果	6
第1節 A区の調査成果	6
第2節 B区の調査成果	8
第3節 C区の調査成果	13
第4節 D区の調査成果	15
第5節 E区の調査成果	16
第6章 まとめ	17

挿図目次

第1図 遺跡の位置と範囲	1
第2図 試掘確認調査及び発掘調査位置図	2
第3図 調査位置図	3
第4図 各調査区全体図	4
第5図 基本層序	5
第6図 A区実測図	7
第7図 A区出土遺物	8
第8図 B区東端部実測図	9
第9図 B区出土遺物(1)	10
第10図 B区出土遺物(2)	11
第11図 B区出土遺物(3)	12
第12図 C区出土遺物	13
第13図 C区実測図	14
第14図 D区東半部実測図	15
第15図 D区出土遺物	16
第16図 E区東端部実測図	16
第17図 E区出土遺物	16
第18図 「貳」「城長」など墨書き土器出土位置及び 「貳」墨書き土器字体分類図	18

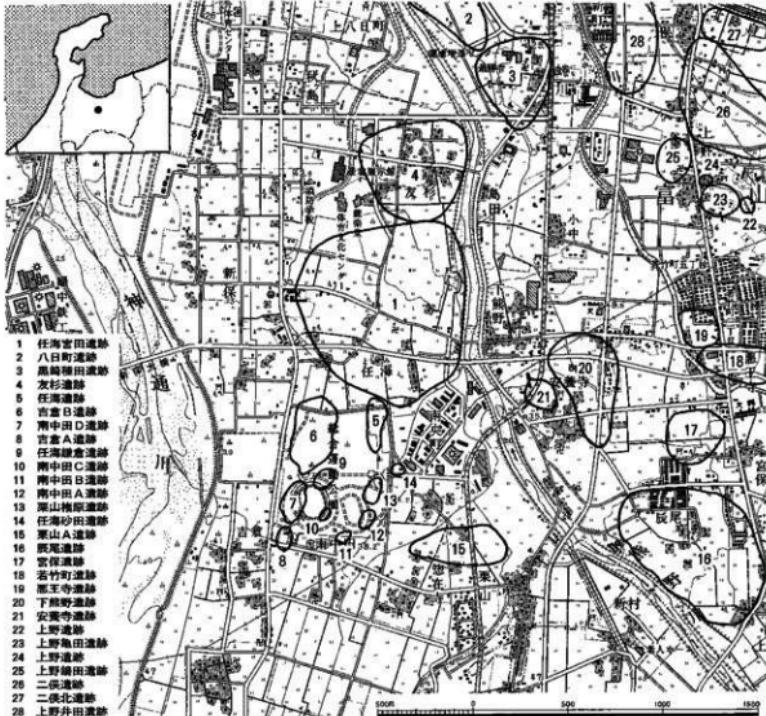
写真図版目次

図版 1	調査区域全体航空写真
図版 2	1. A・B区完掘状況 2. C区完掘状況
図版 3	1. D区完掘状況 2. E区完掘状況
図版 4	1. A区完掘状況 2. 基本層序・B区東端 3. B区12号土坑遺物出土状況
図版 5	1. C区土坑群 2. C区28・37～39号土坑 3. C区28・29号土坑 4. C区30号土坑 5. E区溝状造構
図版 6	1. A区出土遺物(1) 2. A区出土遺物(2)
図版 7	1. B区出土遺物(1) 2. B区出土遺物(2)
図版 8	1. B区出土遺物(3) 2. B区出土遺物(4)
図版 9	1. B区出土遺物(5) 2. B区出土遺物(6)
図版 10	1. C区出土遺物(1) 2. C区出土遺物(2)
図版 11	1. D・E区出土遺物 2. 墨書き土器赤外線写真

第1章 遺跡の位置と環境

任海宮田遺跡は、富山市任海・友杉地内に所在する遺跡であり、第1図に示す通り南北1km、東西900mの広大な範囲に広がる。標高は30~32mを測る。遺跡は西方1kmの神通川と東側に接する熊野川とに挟まれ、両河川合流点の4km程手前、幅2km弱の複合扇状地上で熊野川寄りに立地している。南側には大沢野段丘、さらに南に南中田段丘及び船崎野段丘が控えている。その立地環境により水害にみまわれることが多く、中でも大正3年(1914)には当該地域で大出水し、大きな被害を被ったことが記録されている(神保ほか 1997)。

周辺には縄文時代(中期・晚期)・奈良・平安時代・中世などの遺跡が多数確認されている。特に本遺跡南側では県埋蔵文化財センターが富山県総合運動公園建設に伴い栗山楮原遺跡・南中田A遺跡・南中田C遺跡・南中田D遺跡・任海鎌倉遺跡などの調査がなされてきている(関・河西 1990)。その調査により奈良・平安時代(8~10世紀)・中世(13世紀前後)の堅穴住居・掘立柱建物などが検出され、当該時期の集落跡の存在が明らかとなっている。栗山楮原遺跡では「子林」が数点、南中田D



第1図 遺跡の位置と範囲 (1 : 25,000)

遺跡でも「真口」「吉」「川」「口林」の墨書き土器が出土するという成果が挙がっている。また、近接する吉倉B遺跡でも墨書き土器が出土している。それを遡って古墳時代の遺跡としては伊豆宮古墳、福居古墳などが近在し、縄文時代では大沢野段丘上の伊豆宮II遺跡（中期）や悪王寺遺跡、大利屋敷遺跡、栗山A遺跡（晩期）がある。

（山本）

第2章 調査の経緯

任海宮田遺跡は、昭和63年度から平成3年度に富山市教育委員会が実施した市内分布調査によって発見された遺跡である。市遺跡番号501として「富山市遺跡地図（改訂版）」（1993年）に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。

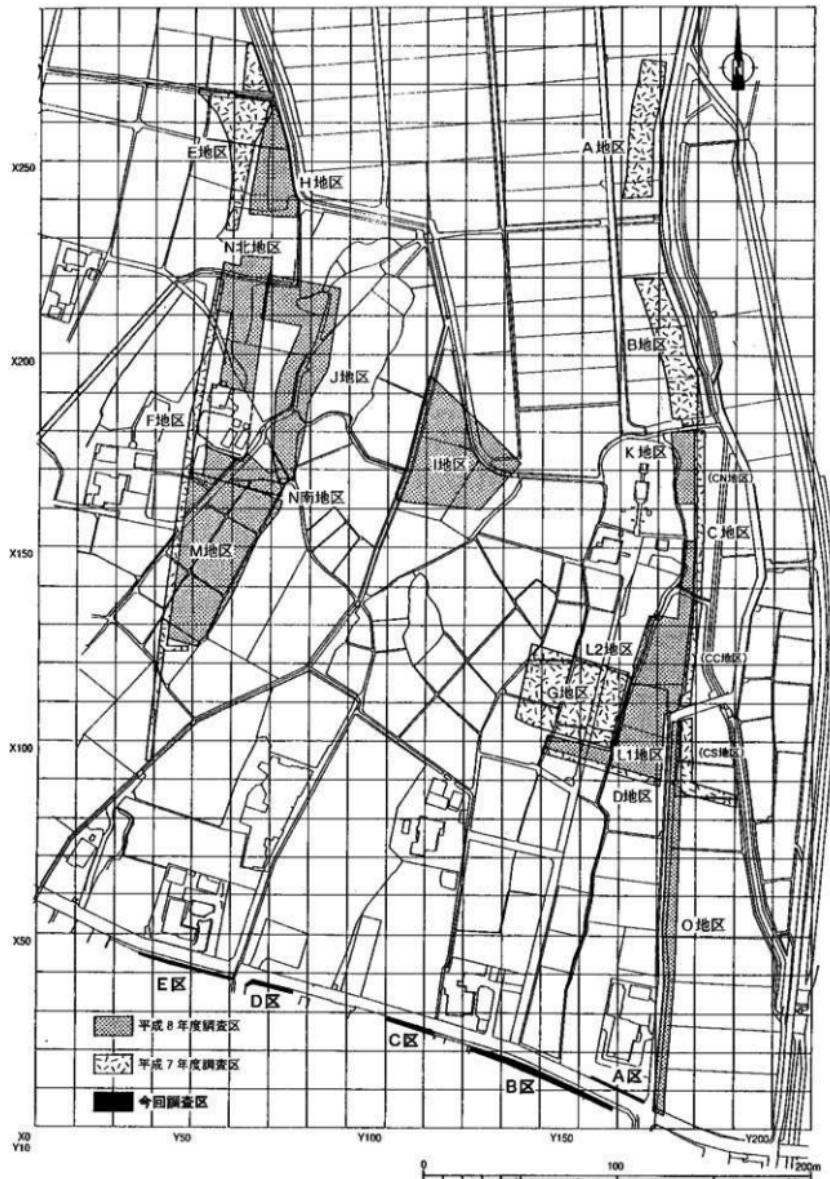
平成6年12月、本遺跡内で、富山県富山土木事務所が工事主体となる主要地方道富山外郭環状線歩道新設工事が計画され、工事にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行なわれた。協議の結果、まず6年度に工事予定のA・B区の試掘確認調査を実施することとなった。試掘確認調査の結果、埋蔵文化財は確認されなかった。

引き続き、平成7年3月にC区・D区の試掘確認調査依頼がなされた。試掘確認調査は同年7月に実施したところ、C区においては埋蔵文化財は確認されず、D区においては30m²に埋蔵文化財を確認した。D区の取扱いについて、富山県国際健康プラザ建設室、富山県土地開発公社、富山県埋蔵文化財センター・富山県富山土木事務所・市教委の5者で協議した結果、平成8年12月に市教委が富山県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け、発掘調査を実施することとなった。（富山県埋蔵文化財センター 1997年）

引き続き平成7年12月にE～G区の試掘確認調査依頼がなされた。試掘確認調査を平成8年4月に

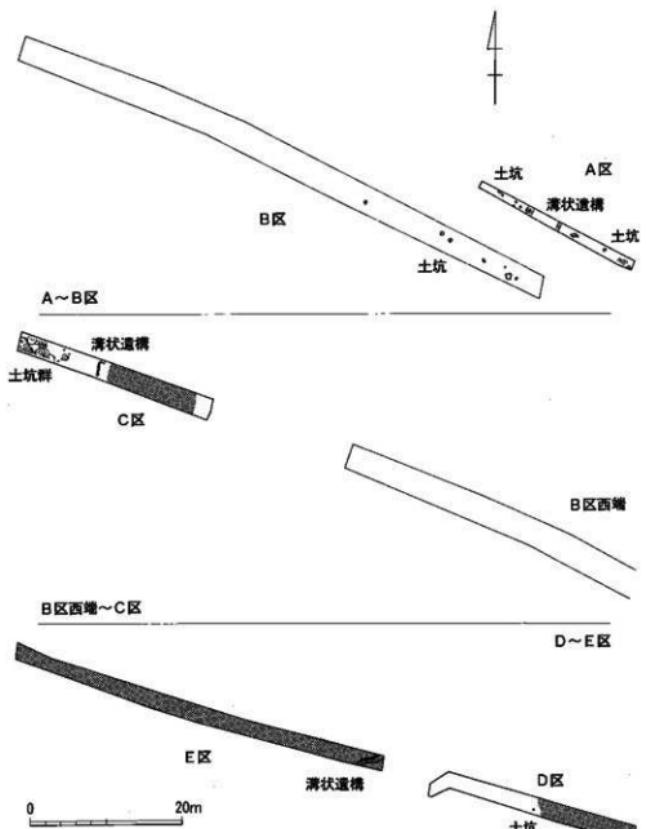


第2図 試掘確認調査及び発掘調査位置図（1：4,000）



第3図 調査位置図 ($S = 1 : 2,500$)

※富山県埋蔵文化財センター「任海宮田遺跡II」第3図に加筆改変



※緑点部は礎層検出

第4図 各調査区全体図 (1:600)

実施したところ、592 m²に埋蔵文化財が確認された。この区域の埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、平成10年度に市教委が主体となり、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、民間委託を活用して行うこととし、市教委の監理のもと株式会社マエダが発掘調査を担当した。

出土品整理及び報告書作成は、平成11年度に株式会社マエダから引きついだ株式会社人間文化都市研究所に委託して実施した。
(堀沢)

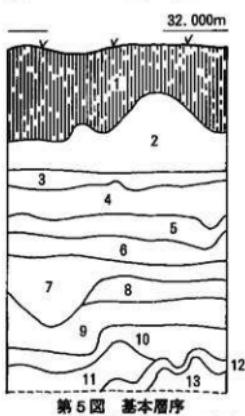
第3章 調査方法と経過

今回の調査は主要地方道富山外郭環状線歩道新設に伴うものであり、拡幅部分を対象として行った。調査区域は全て道路に沿うもので第3・4図の通り、5区画に分けて調査を行った。東端のA区のみ道路北側に位置し、B～E区は道路南側に設定し、途中倉庫等建築物や南方への曲折道路により4区に分断される。これらの調査は、調査前の便宜的呼称名に基づきA～E区としたもので、調査順もそれに従うこととなった。A区が全長23mで、B区東端からE区西端までは直線距離で約253mを測り、総調査面積は592 m²となる。

調査は平成10年12月15日 начиная, 平成11年2月15日までとなつた。基準点測量による調査区位置確定の後、各区とも表土を重機により除去、その後遺構確認、精査を順次行い、調査の進捗に伴ってラジコンヘリによる空中写真撮影を2度行った。
(山本)

第4章 基本層序

本遺跡の調査範囲における層序の特徴は、若干の粘質土を含みつつ、全体に砂質層により構成される点にある。さらに色調等の特徴により分層できた。ここでは、B区東端を基本層序として図示する。各層については以下の通りである。



- 第1層 表土。
- 第2層 灰褐色砂質層。
- 第3層 黄褐色土。
- 第4層 粘質灰色土。
- 第5層 にぶい黄褐色土。
- 第6層 第5層に準ずるが、やや灰色がかった赤みが増す。
- 第7層 やや明るい暗灰色土。
- 第8層 暗灰色土。色斑は第9層より少ない。
- 第9層 明るめの暗灰色土。赤色砂質ブロックが混在する。
遺物包含層。
- 第10層 暗灰色土。赤～橙色の砂質ブロックが混在する。
当層上面で遺構検出。
- 第11層 粘質暗灰褐色土。
- 第12層 赤～橙色灰土。固くしまる。
- 第13層 やや赤みがかったオリーブ色の砂質土。

さらに下層は間もなく砂礫層となって全体に広がっているようである。各調査区でもその砂礫層上面が検出されており、E区の溝状遺構は、礫層に掘り込まれる状況で検出されている。
(山本)

第5章 調査成果

今回の調査で確認された遺構は土坑40基、溝状遺構5条である。なお小ピットも土坑として一括り、把握している。遺物は須恵器・土師器を中心とし、中世土師器・陶磁器などが整理箱(57×35×10cm)5箱分ほど出土した。全体的に小片が多いため、図示にあたっては各地区の状況が凡そ判断できるものに留めた。

(山本)

第1節 A区の調査成果

調査区域の東端に位置し、幅約1m、長さ約23mの調査区である。土坑10基及び溝状遺構2条が検出された(第6図・写真図版4-1)。

土坑は4・5号土坑のみ重複関係を成す他は、それぞれ単独で検出した。なお2・5号土坑はさらに他の土坑との重複の可能性もあるが、覆土の状況からは明確に区分できなかった。円形(6・9号土坑)や長円形または楕円形(1・4・7・8・10号土坑)、さらに不整形(2・3・5号土坑)など上面形態は各種あり、規格性はうかがわれない。

1号溝状遺構は幅35cm程、深さは10cmに満たない浅いものであり、2号溝状遺構は幅70cm前後で、深さは20cm弱と、これも極めて浅いものである。1号・2号溝状遺構は共に北北東～南南西方向を示しており、平行関係にある。

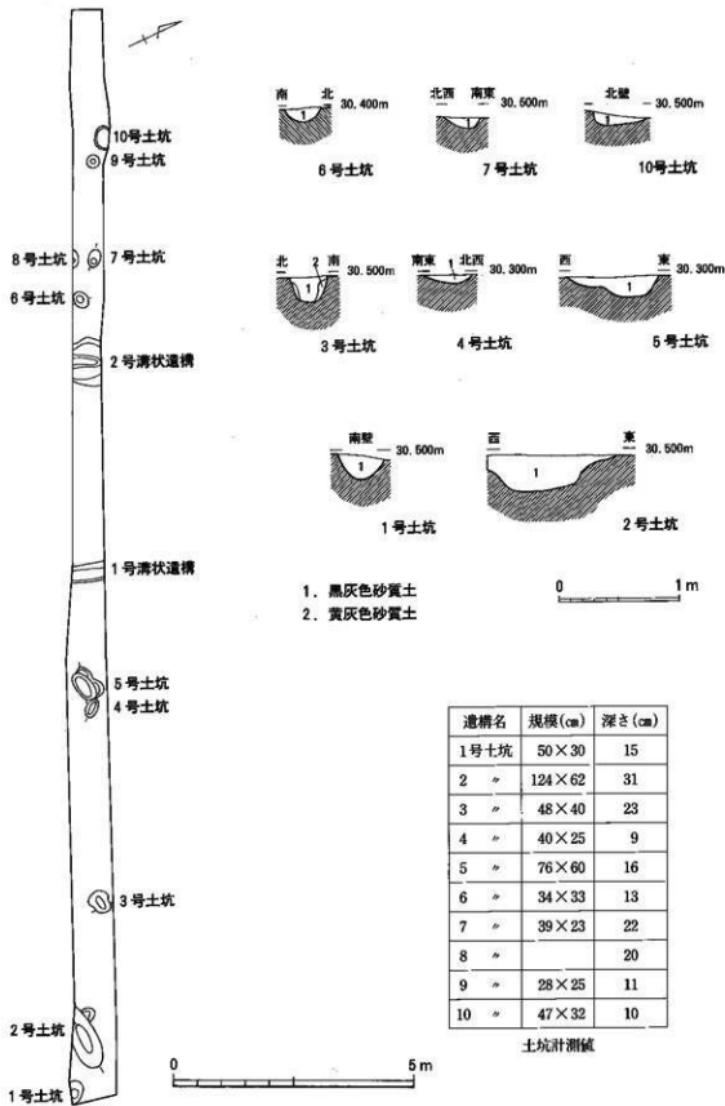
遺物は須恵器・土師器のみで、破片数においては土師器が須恵器よりも多い(第7図・写真図版6)。須恵器は蓋・壺の供膳具が多く、壺・甕といった貯蔵具を遙かに凌いでいるのが特徴的と思われる。1・2は蓋で、1は推定口径12.6cm、器高2.7cm、つまみ径2.3cmを測る。2は推定口径15.3cm、器高3.5cm、つまみ径3.1cmを測り、胎上に砂粒が多く、ざらついた器面となっている。3・4は壺で、3は比較的の遺存状況良好である。推定口径12.2cm、底径8.8cm、器高3.0cmを測る。焼成が若干甘いようで色調も明黄灰色を呈する。4は推定口径11.8cm、底径約8.6cm、器高3.0cmを測る。5・6は高台壺で、いずれも底部のみの遺存である。5は推定底径8.4cm、6は推定底径7.0cmである。特に5は内面に「×」の焼成前線刻がある。9は長頸壺の肩稜部に相当すると思われる破片で、外面に自然釉がかかること。8・10~12は甕破片で、8は頸部に叩き目と思われる痕跡が看取される。胴部片(10~12)は、外面が平行線叩き目であり、11・12は木目交差となる。内面は同心円当て具痕を基本とし、10のように車輪文となるものも含まれる。

土師器は7の壺1点のみの図示に留まった。推定口径14.6cm、推定底径9.4cm、器高3.0cmを測る。摩耗著しく器面調整は不明であるが、内面には赤彩の痕跡が看取される。その他の土師器片では、小型甕の破片などが含まれている。なお壺でも、口唇部にタールの付着した灯明具として使用されたのが明らかな破片が2点認められた(写真図版6-2、右下2点)。

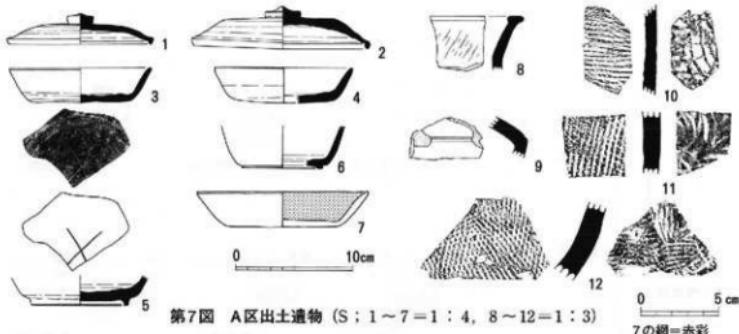
時期についてはいずれも8~9世紀代に属し、3・6は9世紀前半代に比定されよう。

なお、1は5号土坑内出土の破片と2号土坑付近の破片が接合したものであり、7は10号土坑内から出土した。それ以外は遺物包含層からの出土である。全ての土坑を同一時期とは断言できないが、およそ8~9世紀代の土坑群の可能性が高いと思われる。

(山本)



第6図 A区実測図 (S : 遺構図 = 1 : 100, 土層図 = 1 : 40)



第7図 A区出土遺物 (S : 1~7=1:4, 8~12=1:3)

7の網=赤彩

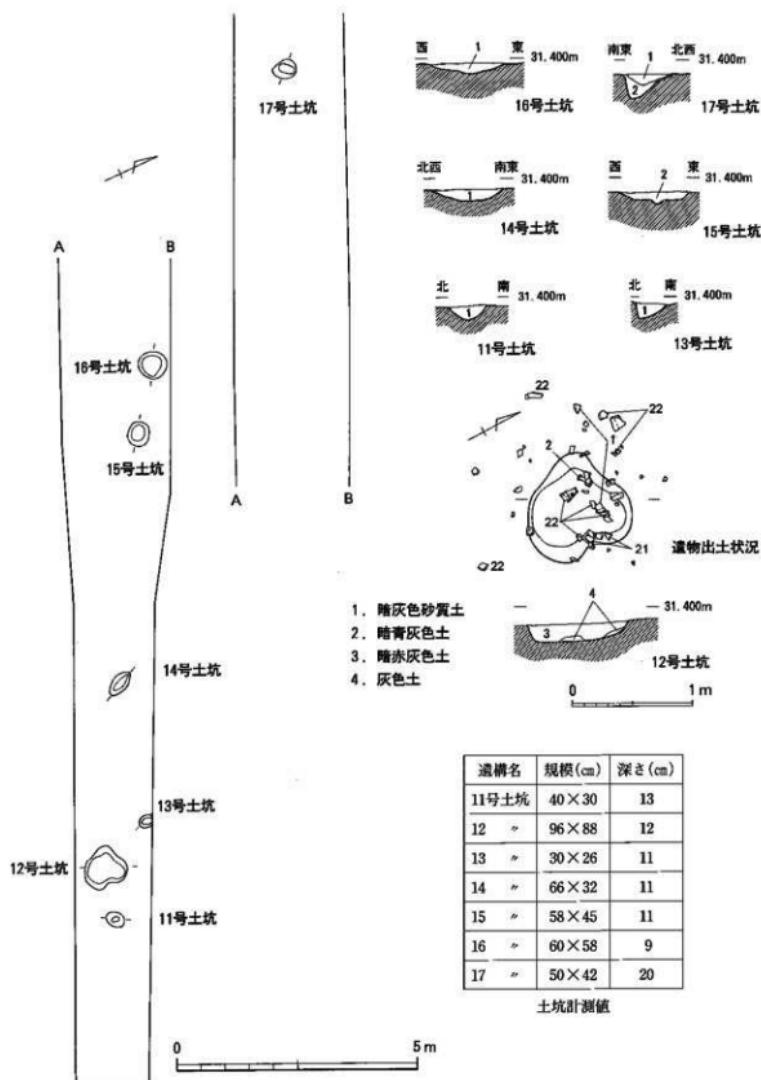
第2節 B区の調査成果

道路を挟んで一部A区と対面する位置にあり、幅約3m、長さ約80mを測る範囲となる。東端部域で土坑7基が検出された。いずれの土坑も他と重複することなく単独で検出されている。特に12号土坑は、その周辺を含めて遺物がまとまって出土した。図示した資料では、第9図1・2の須恵器蓋、第10図21・22の土師器蓋が12号土坑及び周辺出土である。さらに、本調査区において墨書き土器が出土した。土坑の形態は円形・長円形、不整形など一定しないが、深さにおいては10数cmほどと浅いものばかりである。(第8図・写真図版4-2・3)

B区は、調査区中で最も多く遺物が出土した調査区で、A区同様須恵器・土師器を主体とする。その範囲も遺構の検出された東側の15~17号土坑周辺に集中している。また、中世~近世の陶器(八尾焼・越中瀬戸焼・肥前焼)・中世土師器が微量に、そしてバステル型石製品1点と、刀子・釘と思われる鉄片各1点に加え薄板状鉄片が出土している(第9~11図・写真図版7~9)。

須恵器は蓋・壺・高台壺・短頸壺・甕と器種も豊富である。墨書き土器はいずれも須恵器壺に見られる。

1~5は蓋で、比較的の遺存状況良好である。1は口径12.2cm、器高2.9cm、つまみ径2.2cm、2は推定口径13.0cm、器高約3.1cm、つまみ径2.3cmを測り、2は上面において窓内における重ね焼きの痕跡が色調として現れており、周囲が青灰色で内部が径11cm程の円形の灰色となっている。3は推定口径12.0cmを測る小片。4は端部を欠失しているが、推定口径16.6cm、推定器高2.8cm、つまみ径2.0cmを測る。5はつまみ部を欠失するが、推定口径18.0cmと、4と共にやや大振りとなっている。6は無台壺で、推定口径13.6cm、推定底径約10.4cm、器高3.1cmを測る。底外面中央付近には板目痕が看取される。7~11は高台壺で、全体でも無台の壺より量が多い。底径は推定でそれぞれ9.8cm、9.0cm、8.2cm、9.8cm、6.6cmを測る。なお8・11は底外面に焼成前線刻が看取される。12~14が墨書き土器で、いずれも底部外面に記されている。肉眼でも墨痕は明らかでありながら、その判読は困難である。赤外線写真(写真図版11-2)でも、必ずしも鮮明とは言えない。12は右回転の回転糸切痕が看取され、底径6.0cmを測る。「貳」と判読できる。13は推定底径9.0cmで、「繩足」と判読できる(平川南氏のご教示による)。14は墨書き土器であることがわかる程度の小片で土偏の「土」部分の可能性がある。なお、これらと関係するかどうかは不明であるが、D区から転用視と思われる破片が1点出土している(写真図版11-1右上)。8は「X」の記号と思われ、11もその可能性が高いと思わ



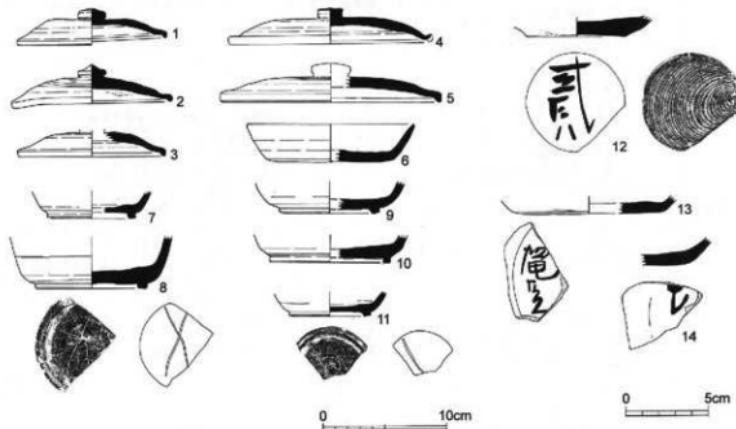
第8図 B区東端部実測図 (S:遺構図=1:100, 土層図・12号土坑=1:40)

れる。15は鍋で、胴がわずかに膨らむ。推定の口径34.0cmを測る。20は今回調査の唯一の短頸壺で、推定口径12.8cmを測る。青みの少ない明青灰色を呈する。23・24・26～30は甕破片。23は口唇部が外側に水平に突出する断面形態となり、特徴的である。胴部外面は平行線叩き目を基調とし、24・28は木目交差となる。26はかき目が加わり、甕というよりも壺の可能性が残る。内面は同心円當て具痕が基本であり、27は車輪文で、胎土・色調の特徴からみてもA区出土の第7図10と同一個体と思われる。29は焼成がやや甘い状態である。

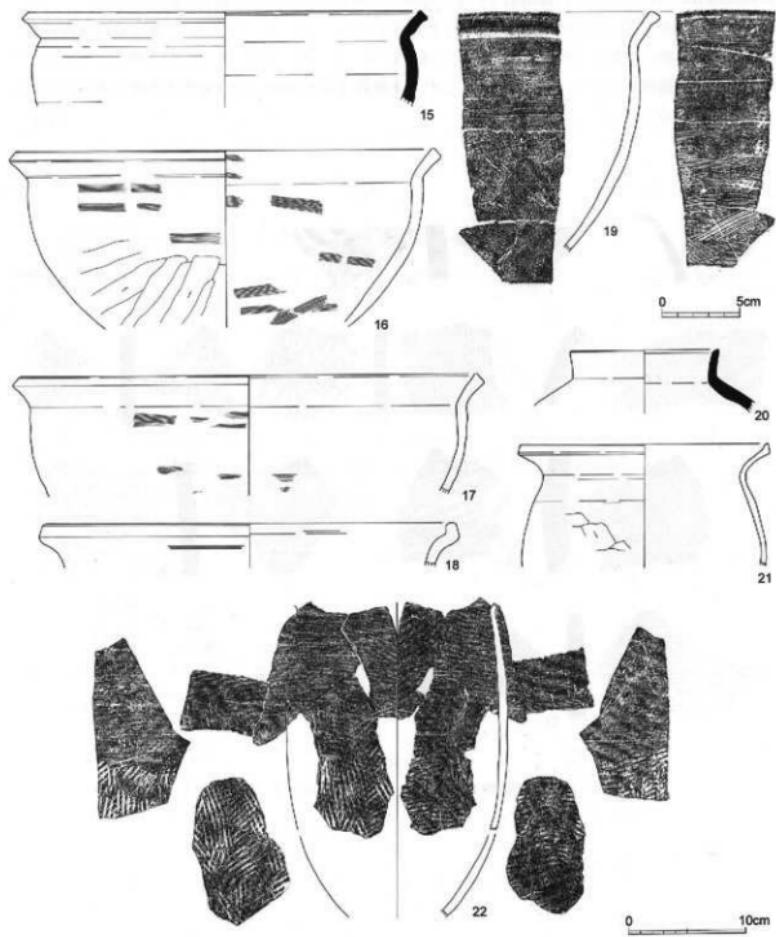
土師器は甕・甕・鍋が出上している。16～19・21・22は甕・鍋である。16・17は、大きく口が開く半球形の形態となり、ロクロ成形の後外面下部にヘラけずりを施し、また外面上部と内面にはハケ目状となる調整痕が看取される。推定口径は16が37.0cm、17が40.4cmである。18は推定口径36.0cmで、外反しながら開き、わずかに内傾するように立ち上がる断面形態となる。19は外面に横方向のハケ目調整が施され、外面下部にはヘラけずりが加えられている。21は推定口径21.6cm、推定胴部最大径21.0cmを測る。全体にロクロ成形の後、外面下部にヘラけずりが施されている。22は丸底と思われる長胴の甕で、胴部のみの遺存である。推定胴部最大径20.8cm、推定頸部径17.0cmを測る。内外面とも下部に平行線の叩き目・當て具痕が残り、また内外面とも横方向にハケ目状調整痕が残る。なお、内黒及び赤彩の施される塊の破片も出土している。

古代の様相としては、8世紀後半に遡るものも含むようだが、回転糸切りとなる10世紀代のものもあり、若干の時間幅が見られる。時期推定が特に可能と考えられる個体を挙げると、1・2・6・15～17・21・22は8世紀後半代、7・8・10・11は9世紀代、17は9世紀～10世紀前半と思われる。

25は中世土師器で、推定口径11.4cm、器高2.1cmである。31・32は珠洲焼で、外面に平行線叩き目が施され、内面は當て具痕の残らない平滑面となる。その他に近世陶器で摺鉢口縁部片も出土している（写真図版9-2、左下）。いずれにしても、中世以降の遺物はごく微量に留まる。



第9図 B区出土遺物(1) (S : 1～11=1:4, 12～14=1:3)

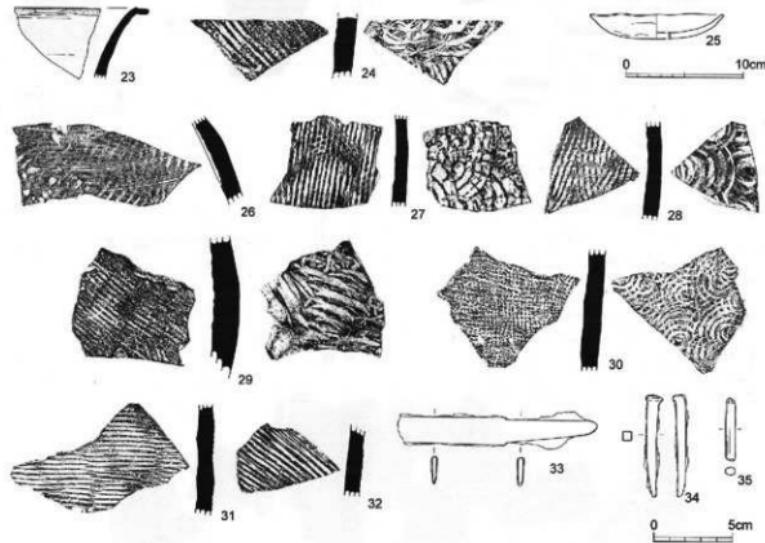


第10図 B区出土遺物(2) (S ; 15~18・20~22=1:4、19=1:3)

33・34は鉄製品である。33は刀子で、切先は欠損する。現存長12.9cm、棟幅3mmで、両刃となり、茎長は5.9cmを測る。34は釘で、先端部をわずかに欠損し、現存長は6.5cmである。この他、鉄製品として釘の小片1点と、板状小片3点が出土している。

35は棒状のバステル型石製品で、長さ4.0cm、径5~6mm程の円柱状を成す。両端部には、面取り状の使用痕がみられる。石材は滑石で、玉作遺跡にて時折見出だされる製品と似ている。

なお、遺構からの出土例は上述した12号土坑のみであり(1・2・21・22)、他は遺物包含層出土である。図示例のおおよその出土範囲としては、3~6・9~12・15・18・23が東側の土坑検出域であり、他は西側地域である。したがって、これら土坑群はA区同様8~9世紀代の所産である可能性が高いと思われる。
(山本)



第11図 B区出土遺物(3) (S ; 23・24・26~35=1:3, 25=1:4)

第3節 C区の調査成果

幅約2.5m、長さ約28mの調査区で、溝状遺構2条のほか、22基の土坑が西端部において群を成して検出された（第13図・写真図版5-1~4）。

4号溝状遺構は調査区中央部でやや傾きながらもほぼ南北に走行する状態で検出された。南部でとぎれる。上面幅約20cmで、深さも10cm程と極めて小規模である。北端部で土坑が重複するように検出されたが、覆土が同一であり、分割することは避けた。

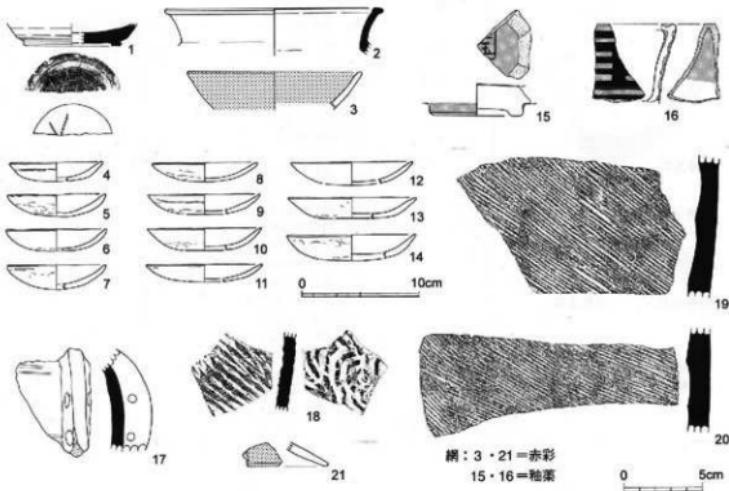
土坑は径20cm程の小ピットから長軸長が1mを越える大型のものなど多様である。深さも10cmから50cm前後と、他の調査区と比べて深いものが多い。

遺物は須恵器、土師器及び珠洲焼・中世土師器・青磁・古瀬戸・越中瀬戸焼・肥前焼がある（第12図・写真図版10）。

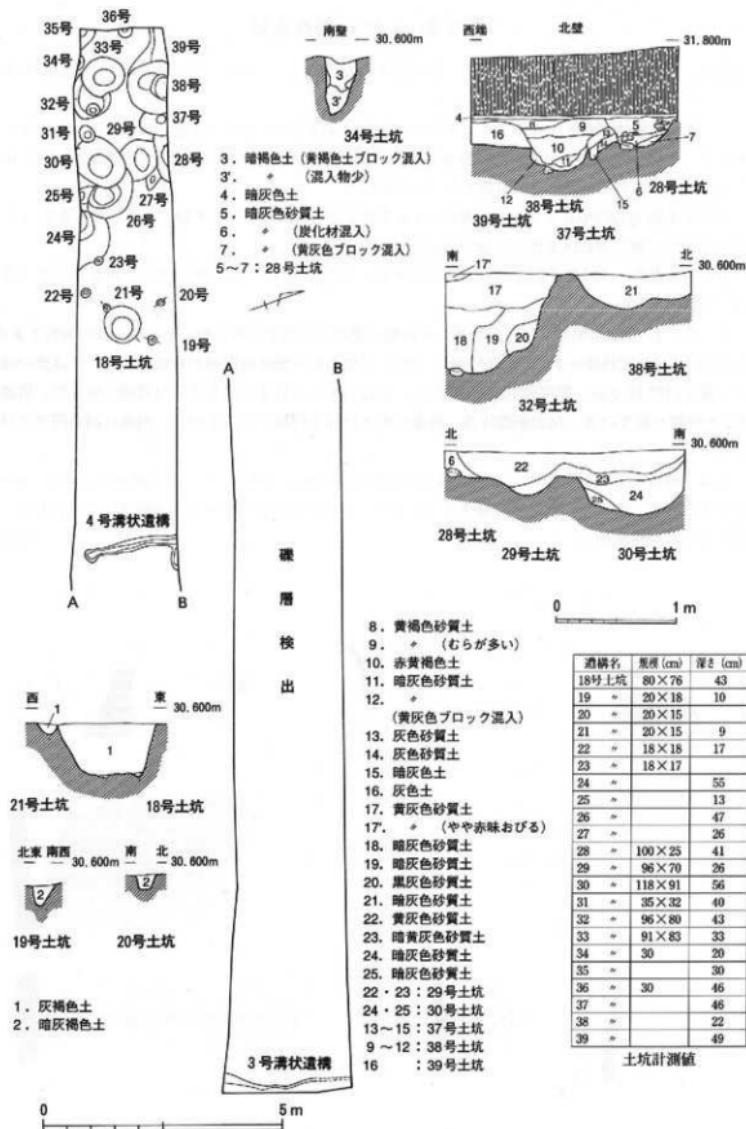
1・2・17・18は須恵器で、高台坏・双耳瓶・甕のみの図示であるが、その他に蓋の破片もある。1の高台坏は推定底径8.4cmで、底外面に「X」と思われる焼成前線刻が看取される。2は甕口縁部で、推定口径8.8cm、頸部径16.0cmである。17はわずかに耳部が遺存する双耳瓶の破片で、貫通孔が2か所穿たれている。18の胴部片は、外面の叩き目は平行線となるもので、内面は同心円当て具痕となる。

3は土師器塊で、小片ながら、敢えて口径が15cm程と推定し図示した。内外面赤彩である。8~9世纪代の所産であろう。21も土師器小片であるが、古墳時代初頭まで遡る高环脚部片と思われる。外
面のみ赤彩が施されている。

(山本)



第12図 C区出土遺物 (S: 1~7=1:4, 8~14=1:3)



第13図 C区実測図 (S:造構図=1:100, 土層図=1:40)

4～14は中世土師器で、11点図示し得ることからもわかるように、調査区ごとの出土量の割合としては多い方である。4は推定口径9.0cm、器高1.6cmを測る。5は口径8.4cm、器高1.9cmを測り、口唇部にタールが付着し、灯明具としての使用が窺える。6は推定口径8.6cm、器高1.9cm、7は推定口径8.4cm、8は推定口径9.0cm、器高1.6cm、9は推定口径9.6cm、器高1.7cm、10は推定口径9.8cm、器高1.9cm、11は推定口径10.0cm、器高1.5cm、12は推定口径10.4cm、器高1.9cm、13は推定口径11.0cm、器高2.2cm、14は推定口径11.0cm、器高1.8cmを測り、大小様々な様相を見せる。なお5以外には、口唇部のタールの付着は看取れない。4～9は14世紀代、10～14は15世紀代の所産と思われる。

15・16は青磁片である。15は碗底部で、推定高台（底部）径6.0cmを測る。内面に文字が看取され、四角に区画した中の「玉」という1文字のみ確認できる。16は香炉で、外面の深い横走太沈線と一部縦位の沈線を加えた上に厚く釉をかけて文様としている。内面は上部まで釉を施し、下部は露胎となる。14～15世紀代の所産と思われる。19・20は珠洲焼の同一個体で、外面には幅の狭い平行線叩き目が施され、内面は円螺等の平滑な当て具が使用されたと思われる。

6～8・11・12・21が土坑出土であり、6が24号土坑、7・11・12が38号土坑、8が32号土坑、21が30号土坑である。いずれも覆土上層からの出土である。また、11は31号土坑上端脇、12が33・39号土坑の間から出土した。その他の傾向を見ると、13が東端付近、2・14が4号溝状造構付近という状況で、その他は土坑群検出域の上部包含層出土である。これにより東側が古代の様相が強く、土坑群は中世の所産である可能性が高いものと思われる。
(山本)

第4節 D区の調査成果

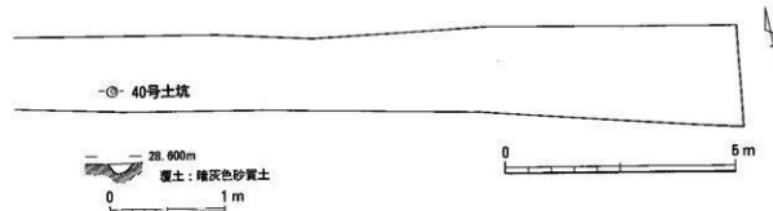
幅約2m、長さ約28mの調査区で、中央部で径20cm程、深さ10cmの小土坑1基が検出された（第14図）。

遺物は少ないが、多時期に亘っている。造構からの出土はない（第15図・写真図版11-1）。

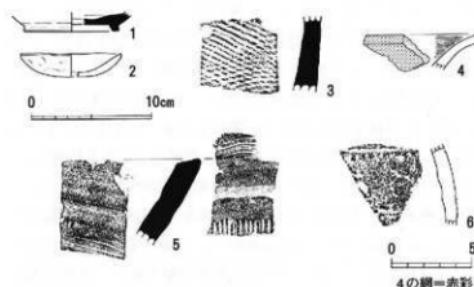
4は今回の調査で唯一大きく時代が遡る土器片で、詳細は不明ながら古墳時代初頭頃かその前後と思われる壺の口縁部片である。大きく開く形態で、内外面とも丁寧なヘラみがきと共に、鮮やかな赤彩が残っている。

1は須恵器高台環で、推定底径9.0cmを測る。9世紀代の所産と思われる。なお図示し得なかったが、蓋の破片も1点出土しており、さらに転用観と思われる底部小片が1点出土している（写真図版11-1右上）。

2・3・5・6が中世以降に属する。2の中世土師器は、推定口径8.4cm、器高1.9cmを測る。3



第14図 D区東半部実測図 (S: 造構図=1:100, 土層図=1:40)



第15図 D区出土遺物 (S : 1・2=1:4, 3~6=1:3)

は珠洲焼窯胴部片で外面に平行線叩き目が看取され、内面は平滑となっている。5は珠洲焼の片口鉢片で、口唇部に櫛歯状工具による波状文が加えられている。15世紀の所産であろう。6は古瀬戸の筋壺で、自然釉が厚く不鮮明ながら、下部は4条となっている。またその他に、肥前系染付碗の破片も出土している(写真図版11-1、上段右下)。(山本)

第5節 E区の調査成果

幅約2m、長さ約50mの調査区で、東端部にて溝状遺構1条が検出されたのみである(第16図・写真図版5-5)。

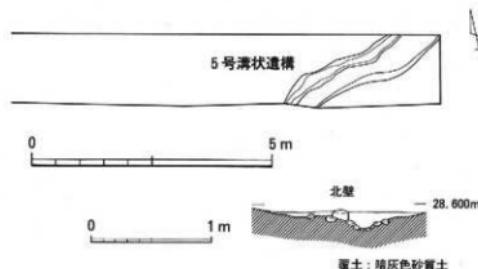
溝状遺構は砂礫層を掘り込むような状態で検出されており、やや傾きながらもほぼ東西方向となり、若干の蛇行状態も見せる。上面幅60~80cm程で、深さは15cm程と、他の溝状遺構同様極めて浅い。

遺物の最も少ない調査区で、3点のみ図示したが、その他に須恵器高台壺や同窯胴部片などが少量混在する程度である(第17図・写真図版11-1)。

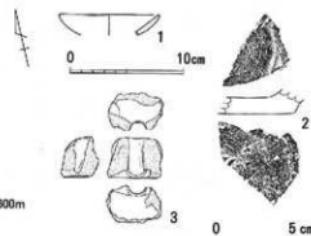
1は中世土師器で、推定口径8.8cmを測る。2は越中瀬戸焼の摺鉢底部片で、外面に糸切痕が、内面には円周状に櫛歯による卸し目が入れられている。

3は土製品である。一見羽口のようにも思われるが、上下両面に成形面が看取されるため、羽口ではない。正面図下部は平坦面をなし、径1cm程の上下方向の貫通孔(?)と共に、周間に斜行する筋が残るものである。全体像の把握が困難で、所属時期も不明である。ただし、二次焼成の状態が認められることから、何らかの鋳型の可能性があるかもしれないが、その確証もない。遺構からの出土例はなく、遺構の時期は不明である。

(山本)



第16図 E区東端部実測図
(S : 遺構図=1:100, 上層図=1:40)



第17図 E区出土遺物
(S : 1=1:4, 2・3=1:3)

第6章 まとめ

今回の調査は、歩道拡幅部に限定された調査であったが、古代（奈良・平安時代—8～10世紀）、中世（14世紀代）等、多時期にわたる成果を挙げることが出来た。検出された遺構は土坑40基、溝状遺構5条であり、それらは遺跡全体の中で極めて断片的なものでしかないが、従来確認されている古代・中世の遺構群の一部が検出できた。

遺構の時期は、東側のA・B区の土坑群が古代、C区西側の土坑群が中世に属する。

出土遺物では、B区における3点の墨書き土器が特筆される。1点は「貳」、もう1点は「綱足」と判読される。字体を見ると「綱」のつくりの部分は「鬼」ではなく、「罠」と書かれている。「綱足」は「ただたり」と読み、人名と考えられる。「綱」を用いた人名は、8世紀中頃に、越中国府に赴任した官人のなかに、越中国介「内蔵忌寸綱麻呂」・越中掾「久米朝臣広綱」などが見られる。本遺跡で人名を表すものには「丈部田能古」「有成」などがある。さらにもう1点は報告中では土偏の「土」部と考えたが、「北」になる可能性も考えられる。これまでに本遺跡で出土した墨書き土器（点数約250点。内容約30種）と比較すると、土偏と考えれば「城長」の「城」があり、「北」と考えると「北家」がある。

なお、加えて「×」の記号と思われている内容を線刻した須恵器はこれら墨書き土器より若干時期が遅るものだが、遺跡の継続性という観点で解釈していく必要性は指摘しておきたい。

また、中世遺物にも若干触れておきたい。灯明具としての土師質土器や青磁の碗・香炉の存在は、単なる一般庶民の集落というより、やや高貴な階級の存在を考えていく必要がある。それが土坑群という性格を断じ難い遺構からの出土であることの意義が問題となろう。これら土坑群は、それらの使用に伴うとは考え難い。したがって当該地点周辺の様相が明らかにされる必要がある。（山本）

●「貳」墨書き土器について

本遺跡出土の墨書き土器のなかで、最も多く出土しているのは「城長」墨書き土器で66点、つぎに多く出土しているのが「貳」墨書き土器で40点ある。「貳」は熊野川べりで集中して出土しており、今回の調査区を含めて4ヵ所に分布している（第18図）。「城長」は60%が土師器であるのに対して、「貳」は90%が須恵器に書かれている。文字によって、主体とする上器の使いわけが見られる。

3は8世紀前半の堅穴住居からの出土で、5～11は9世紀後半である。この時期の点数が最も多い。

「貳」墨書き土器の字形は、「貳」（A類）・「貳」（B類）・「貳」（C類）・「貳」（D類）の4類がある。A類（2～4・6～8）の点数が最も多く、字体は行書体が多い。筆跡的に見ると10画目をはねるものとはらう、もしくはとめるものがある。また、「貝」の字を略して書くものも1点（8）ある。A類は少なくとも4パターンの筆跡の違いが見られる。B類（1～5・9～10）は筆跡的に、11画目をはねるものとはらう、もしくはとめるものがある。A類同様「貝」の部分を略して書くもの（9）もある。今回出土した「貳」はこの類に属する。C類（11）は1点あり、草書体である。D類は3点ある。おそらくB類の2画目か3画目を省略したか、字体を間違えていると考えられる。

A類は8世紀前半から出現し、9世紀後半まで存続する。B・C類は8世紀後半から9世紀に見られ、字体は時期が新しくなるにつれて、バラエティーが見られる。

本遺跡は、奈良・平安時代に大規模開発が行われた。その中心が出土量の多さと広範囲な広がりから、「城長」墨書き土器と関係のある集団によるものと考えられる。「貳」墨書き土器と関係のある集団は、「城長」よりも小規模であるが、「城長」集団よりも出現が早い。9世紀後半に出現する「城長」集団とともに開発を推し進めたと考えられる。

（堀沢）



第18図 「武」「城長」など墨書き土器出土位置 (1:5,000) 及び「武」墨書き土器字体分類図

(字体は1:2 数字の横のアルファベットは類を表す。)

●「武」墨書き土器 (●30点・●1点) ▲「城長」墨書き土器 (▲63点・▲1点)

■その他の墨書き土器 (■2点以上・■1点)

参考文献

- 古澤伸・安会井伸ほか 1996 「富山県高山西田遺跡発掘調査報告書」富山県埋蔵文化財センター
- 井代孝道・橋本正香ほか 1997 「江戸時代道路網」富山県埋蔵文化財センター
- 岡 治・河西信二 1990 「富山市総合運動公園内遺跡発掘調査報告書Ⅰ 楽山筋道路・南中田A道路・任海筋道路・南中田C道路」富山県埋蔵文化財センター
- 藤山富士夫 1991 「バスク形の製品について」『考古学論究』創刊号
- 坂沢裕一 1988 「任海富田道路をめぐる唐物館」『高岡史研究』第6回
- 東沢裕一・近藤誠子 1998 「富山市任海古墳群試掘調査要領—系井向吉野跡特例土地改良事業に伴う試掘調査(3)」富山市教育委員会
- 古岡朝暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

写 真 図 版



調査区域全体航空写真（北西方向から）

図版 2



1. A・B区完掘状況（上が北）



2. C区完掘状況（上が北）



1. D区完掘状況（上が北）

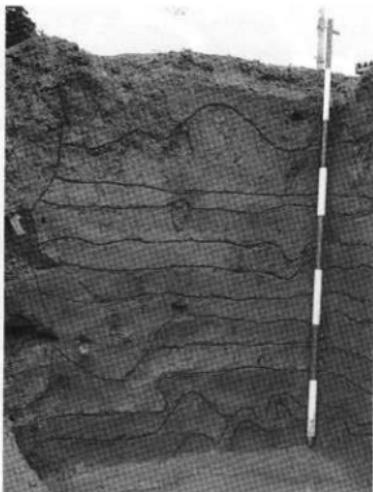


2. E区完掘状況（上が北）

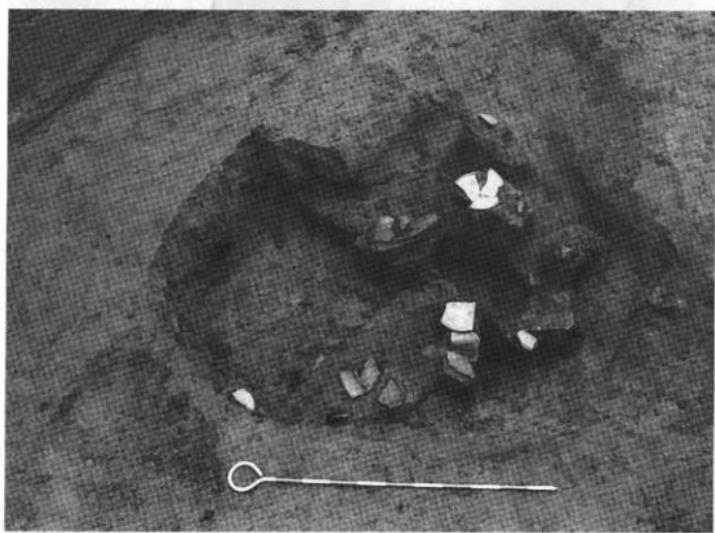
図版 4



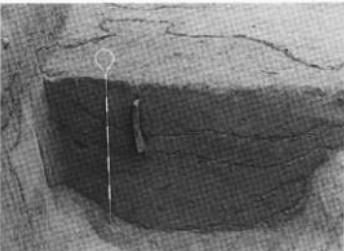
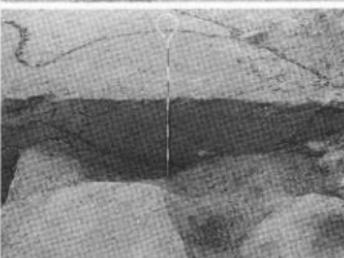
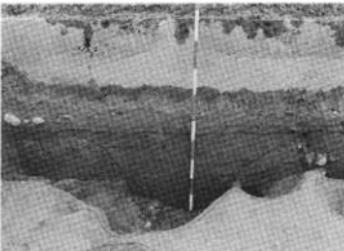
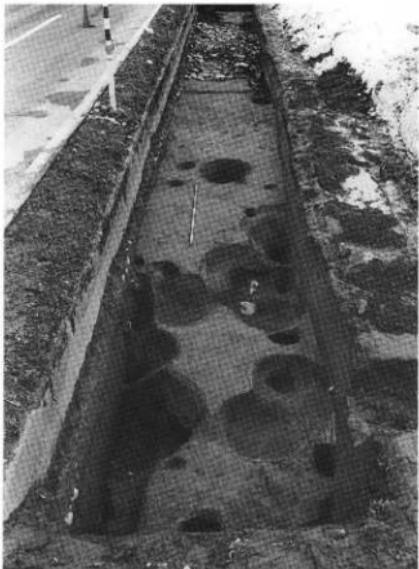
1. A区完掘状況（北西から）



2. 基本層序・B区東端（西から）



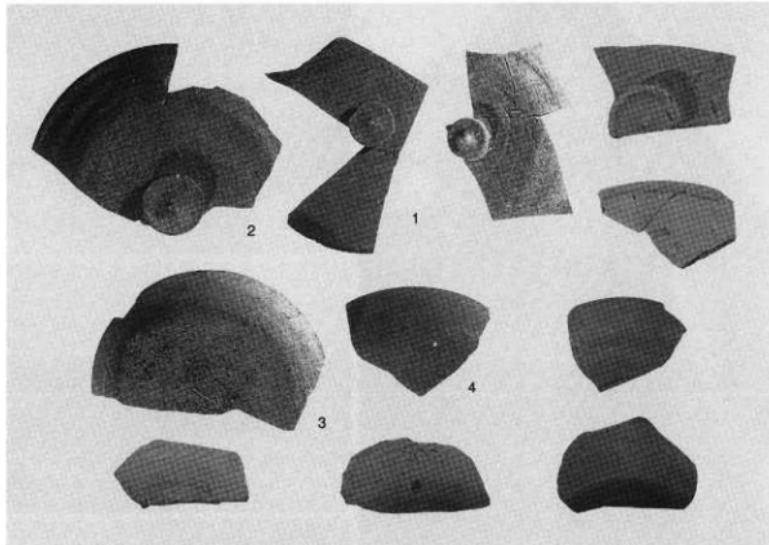
3. B区12号土坑遺物出土状況（東から）



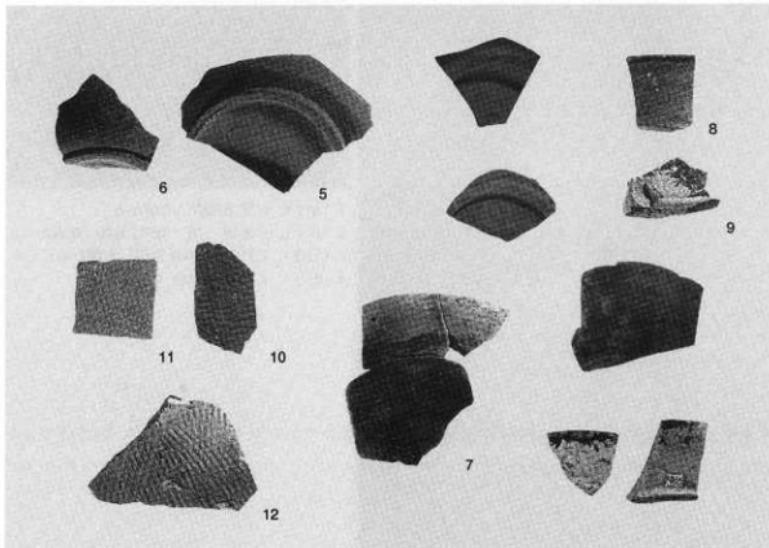
1 (左上)。C区土坑群（北東から）
2 (右上)。C区28・37～39号土坑（南西から）
3 (右中)。C区28・29号土坑（北西から）
4 (右下)。C区30号土坑（北西から）

5. E区溝状遺構（北東から）

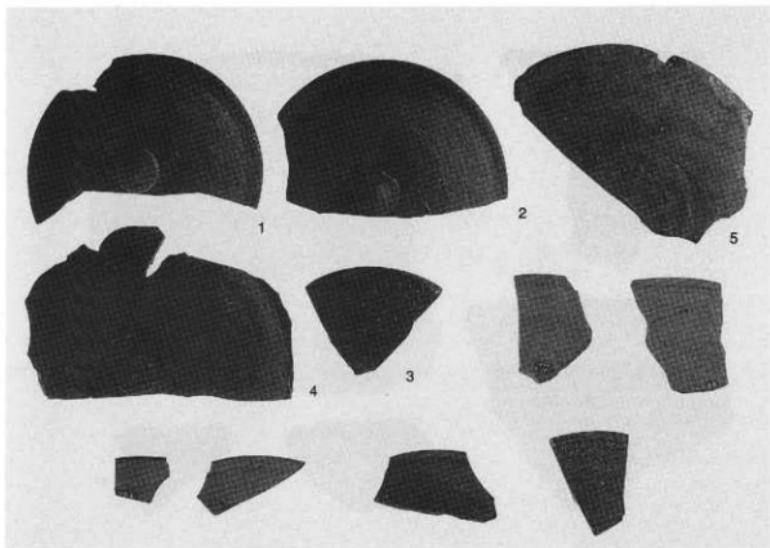
図版 6



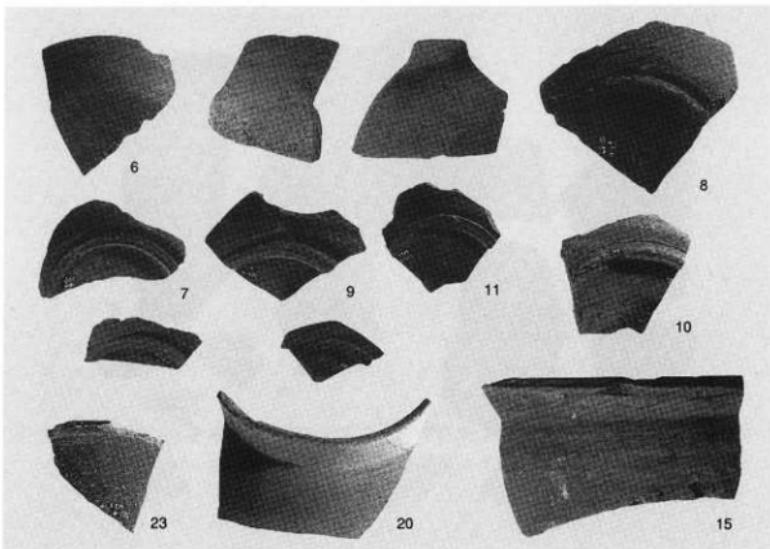
1. A区出土遺物(1) 須恵器 (番号は第7図に対応)



2. A区出土遺物(2) 須恵器・土師器 (番号は第7図に対応)

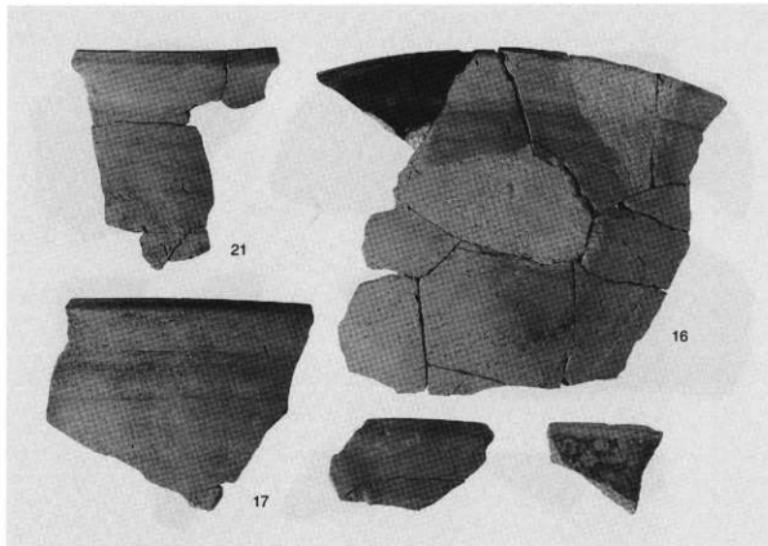


1. B区出土遺物(1) 須恵器 (番号は第9図に対応)

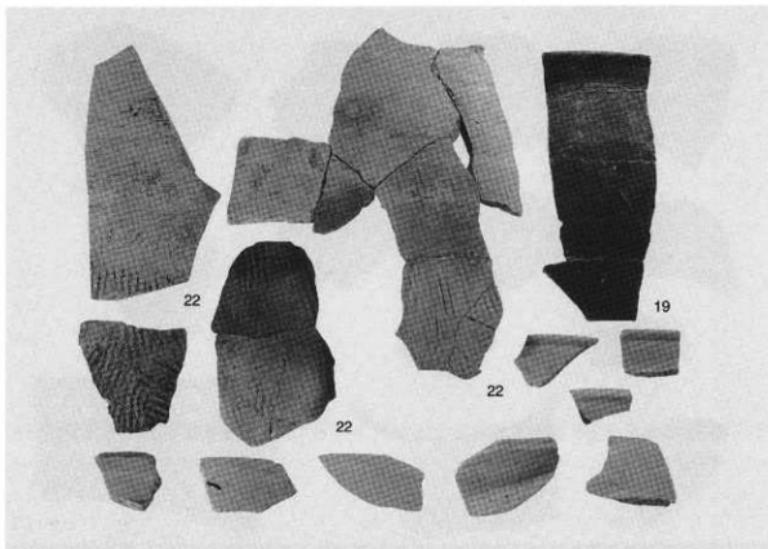


2. B区出土遺物(2) 須恵器 (番号は第9・10・11図に対応)

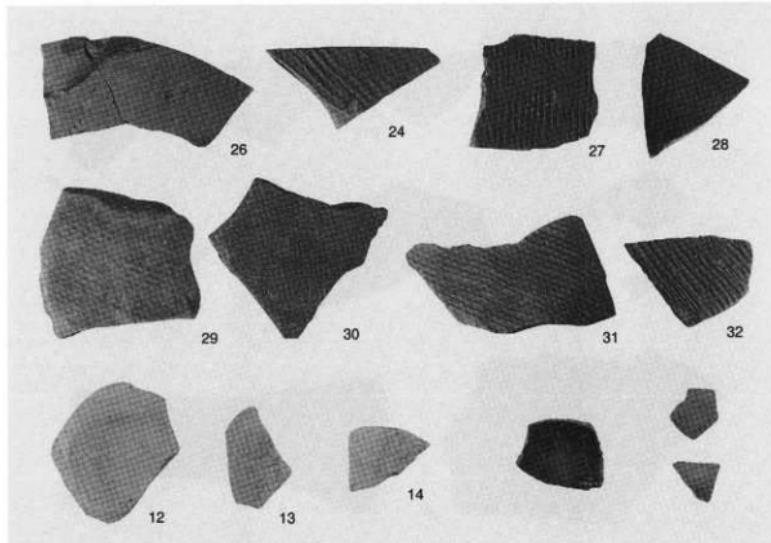
図版 8



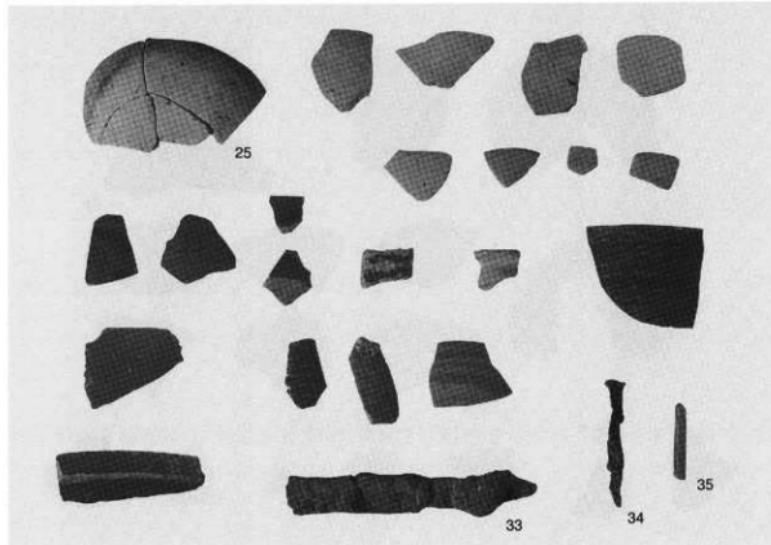
1. B区出土遺物(3) 土師器（番号は第10図に対応）



2. B区出土遺物(4) 土師器（番号は第10図に対応）

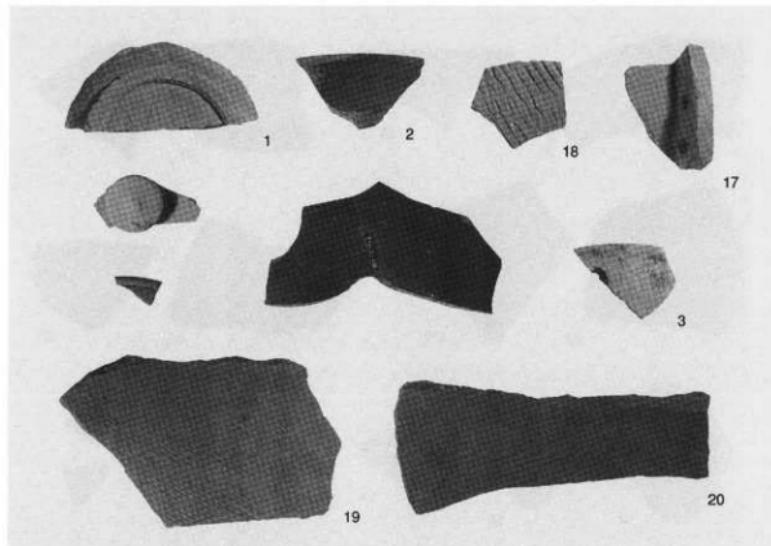


1. B区出土遺物(5) 須恵器・土師器・珠洲焼 (番号は第9・11図に対応)

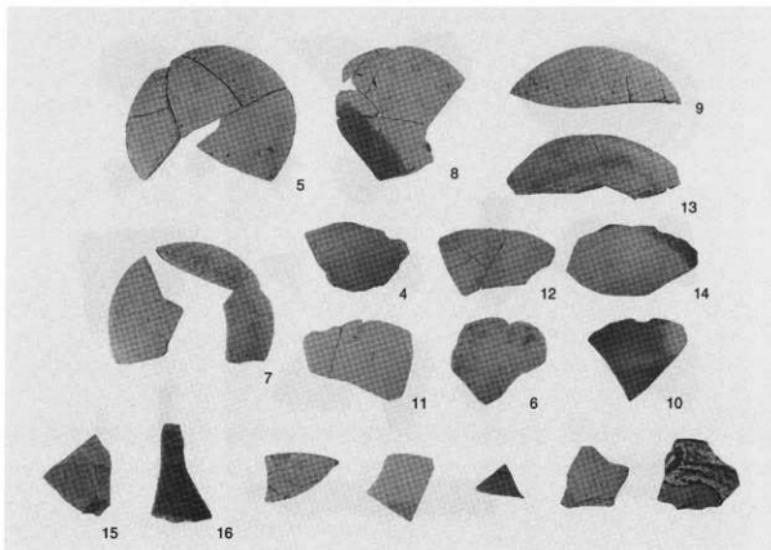


2. B区出土遺物(6) 中世土師器・近世陶器・鉄製品・石製品 (番号は第11図に対応)

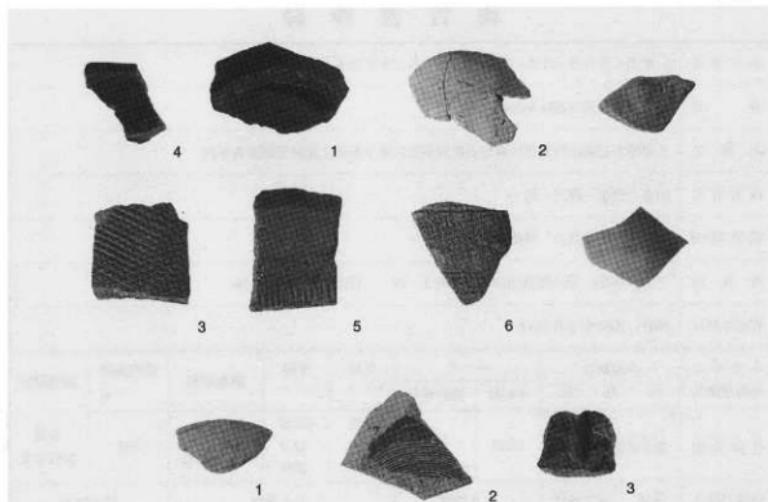
図版 10



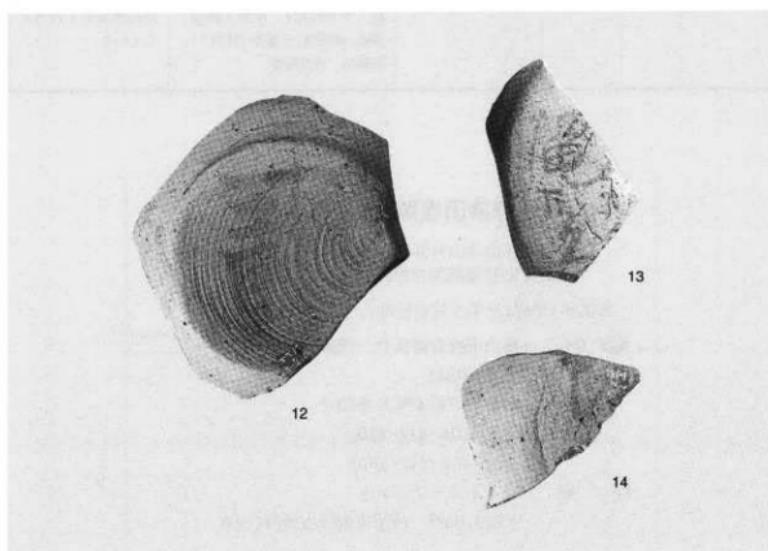
1. C区出土遺物(1) 須恵器・土師器・珠洲焼 (番号は第12図に対応)



2. C区出土遺物(2) 中世土師器・青磁・中・近世陶器 (番号は第12図に対応)



1. D・E区出土遺物 上2列:D区 土師器・須恵器・珠洲焼・中世土師器・陶磁器・土製品(番号は第15図に対応)
下 列:E区 中世土師器・近世陶器・土製品(番号は第17図に対応)



2. 黒岩土器赤外線写真(番号は第9図に対応)

報告書抄録

ふりがな	とやましとうみみやたいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書						
副書名	主要地方道富山外郭環状線歩道新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
編著者名	山本 哲也・堀沢 祐一						
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5-12 TEL 076-442-4246						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
任海宮田	富山県富山市任海	市町村 通跡番号	36度 37分 50秒	137度 12分 20秒	1998.12.15 ～1999.2.15	592	歩道 新設事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
任海宮田	集落跡	奈良時代 ～中世	土 坑 溝状遺構	40基 5条	土師器（古墳時代初頭・奈良時代・平安時代）、須恵器（奈良・平安時代）、中世土師器、青磁、珠洲焼、上製品（鏡型？）、石製品、近世陶器	墨書き器（須恵器）が 3点出土。「×」の線 刻須恵器も4点出土 している。	

富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書

—主要地方道富山外郭環状線歩道新設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告—

2000年(平成12)年3月31日発行

編集・発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

TEL 076-442-4246

FAX 076-442-5810

印 刷 (株)エイコープリント

〒232-0023 横浜市南区白妙町5-69